西宮のNPO

認知症家族の体験紹介

介護の悩み 和らげる一冊

加古川　吉田さん夫妻の歩みも掲載

認知症の人を介護する加古川市などの6家族の苦楽を描いたコミックエッセー「ボケた家族の愛しかた」（高橋書店）が出版された。苦悩の印象が強い介護だが、心身の負担を和らげてくれるヒントが満載。介護者にエールを送る内容で、同市野口町長砂の吉田正巳さん(71)、由紀子さん(71)夫妻の歩みも取り上げている。（大久保斉）

執筆したのは、NPO法人「つどい場さくらちゃん」の丸尾多重子理事長。介護者らが集まる同名の交流サロンを西宮市で運営する。長尾クリニック（尼崎市）院長の長尾和宏医師が監修した。

本書は父母、義父母、配偶者の介護を題材に6章で構成。認知症の人と暮らし、同サロンを利用したことがある6家族の介護体験を漫画で紹介している。

苦労や葛藤、喜び、感動などを描くとともに、「まるちゃんの言葉」と題したエッセーでは介護者にのしかかる心身の重しを取り除いてくれる助言が並ぶ。介護疲れの解消法をはじめ、相手に入浴やトイレ介助などを拒否された場合の対処法なども「Q&A」方式で示した。

コミックエッセーで介護体験が紹介された（左から）吉田正巳さん、由紀子さん夫妻、漫画を担当した北川なつさん＝西宮市内

吉田さん夫妻は漫画で登場。由紀子さんが認知症と診断され、正巳さんは病気の進行を遅らせようと漢字・計算ドリルを課すが、「自信を失わせたのではないか」と悩んだ場面を収録する。

由紀子さんの母が亡くなった際のエピソードも紹介。臨終のときに無言だった由紀子さんが読経の流れる通夜で突然、唱歌を歌い始める。それを見た正巳さんが「認知症の人は何もかも分からなくなった人ではない。まさに心は生きている」と語るシーンで締めくくっている。

作画は、介護施設での勤務歴がある漫画家の北川なつさん(44)＝京都市＝が担当。「介護者の気持ちが楽になったきっかけの部分を読んでほしい」と話している。

A5判、144ページ。1188円。高橋書店編集部☎03・3943・4529

吉田さん夫妻の介護体験を描いた漫画の一部（高橋書店提供）